

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響を受けて実施した 保健師基礎教育における代替実習の内容と学生の学び

永井智子 佐々木綾花 安齋ひとみ
(Tomoko NAGAI, Ayaka SASAKI, Hitomi ANZAI)

【要約】

《目的》新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行により、2020年度の保健師国家試験受験資格を得るために必修の実習である公衆衛生看護学実習Ⅱ（地域保健活動）をオンラインによる代替実習に変更して実施した。よって、本稿では、代替実習の内容を振り返り、実習における学生の学びと課題を記述することを目的とする。

《方法》保健師課程の学生26名の内、実習目標に対する自己評価表19名、科目評価アンケート21名、最終レポート26名のデータを分析した。自己評価表と科目評価アンケートは記述統計、最終レポートは内容分析を行った。

《結果》学生の自己評価表の点数は、4段階のスケールで、すべての項目において中央値は3～4の範囲であり、平均値は3点台であった。すべての学生が目標に対して、「よくできた」「だいたいできた」と評価した。科目評価アンケートでは、実習の満足感、実習目標の理解、教員の関わり等に関する項目は評価が高い一方で、パソコンを長時間使用することによる身体的・精神的影響を尋ねた項目の評価が低かった。最終レポートの内容分析では、地域づくりや施策化に関する考え、保健師の役割や姿勢等に関すること等の10のテーマが抽出された。

《結論》オンラインによる実習であったが、学生は保健師として求められる知識や技術を幅広く学び、保健師の役割を自分の言葉で表現できていた。しかし、今回の代替実習は教員が課題を作成し、その枠の中で進むものであった。学生は臨地での住民や指導者、関係職種等との相互作用の中で学ぶ経験をする事ができなかった。これらの影響を長期的に評価していく必要があると考える。

キーワード：保健師、基礎教育、実習、COVID-19、公衆衛生看護学

I. 緒言

2009年の保健師助産師看護師法の改正では、保健師の教育年限が6か月以上から1年以上に変更され、保健師教育についての教育内容、教育方法の見直しと充実が図られた。これを受けて2011年の保健師助産師看護師学校養成所指定規則の改正では臨地実習が4単位から5単位に増え、臨地での教育の充実が求められてきた^{1,2)}。しかし、新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）の世界的な感染拡大と政府による緊急事態宣言の発出により³⁾、学生の学習環境は大きな影響を受け、本学の教育においても早急にビデオ会議シス

テムおよび映像教材を活用した授業（以下、オンライン授業）へ変更が行われた。実習については、厚生労働省・文部科学省から「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について」が発出され⁴⁾、実習施設の確保が困難な場合には、学生への十分な説明の上で、臨地での実習に代えて演習又は学内実習を実施することにより、必要な知識や技能を修得することとして差し支えないことが示された。

本学では、保健師国家試験受験資格を得るために必修の実習である公衆衛生看護学実習を公衆衛生看護学実習Ⅰ（産業保健・学校保健活動）と公衆衛生看護学

実習Ⅱ（地域保健活動）の2種類の実習で実施している。公衆衛生看護学実習Ⅱの主な実習施設は保健所と保健センターであり、実習期間は例年4月～7月に行っている。しかし、2020年4月～7月は、保健所は感染者や濃厚接触者への対応の第一線として、積極的疫学調査等の対応による業務のひっ迫が生じており、保健センターにおいても保健所への人員派遣や地域住民の感染予防のために事業の調整や相談等を行っていた。

本学の保健師課程の実習先である都道府県・市町村は、全国的にも感染者の多い地域であった。実習予定の施設と実習方法について相談したところ、多くの実習施設で実習受け入れが困難または時期の再検討という状況であった。さらに、本学の学生は遠方からの通学者も多く、学生の移動時の感染リスクも危惧された。

よって、実習予定施設の受け入れ体制、学生の感染予防対策、学生への公平な学びの機会の提供の観点から、教員で検討を重ね、2020年度の公衆衛生看護学実習Ⅱを、実習施設と協議し、オンラインによる代替実習として行うことを決定した。しかし、看護職の教育における臨地実習は、学生が実践の中に身を置き、学内で学んだ知識・技術・態度の統合を図りながら、実践できる段階としていく重要な学習過程である⁵⁾。臨地実習の経験が得られないことは、学生の学びにおいて大きな影響があることが推察された。よって、本稿においては、2020年度の公衆衛生看護学実習Ⅱのオンラインによる代替実習の内容を振り返り、実習における学生の学びと課題を記述することを目的とする。

Ⅱ. 公衆衛生看護学実習Ⅱの概要

1. 本学における公衆衛生看護学実習Ⅱの位置づけ

本学の保健師課程の実習は、公衆衛生看護学実習Ⅰ（産業保健・学校保健活動）、公衆衛生看護学実習Ⅱ（地域保健活動）からなる。

公衆衛生看護学実習Ⅰ（産業保健・学校保健活動）は、3年次の春学期に実施され、単位数は1単位である。産業保健と学校保健の場で対象のライフスタイルや発達段階に応じた支援を理解し、産業看護職や養護教諭の役割を学ぶ内容である。

公衆衛生看護学実習Ⅱ（地域保健活動）の単位数は4単位であり、4年次の春学期に実施される。主な実習施設は保健所と保健センターであり、地域で生活す

るあらゆる年齢層と健康段階の人々を対象に保健活動を展開し、地域における健康課題の解決に向けた保健師としての実践能力の基礎を習得する内容である。

なお、本学の保健師課程は選択制であり、2年次の秋学期に選抜試験を行っている。2020年度の公衆衛生看護学実習Ⅱの履修者は26名であった。

2. 実習日程

例年は、学内オリエンテーション1日、保健所6日間（保健所オリエンテーションを含む）、市町村12日間（地域診断を含む）、学内発表会1日で構成される。2020年度は、すべてオンラインを用いた実習に切り替え、オリエンテーション1日間、地域診断実習5日間（発表会を含む）、保健所実習5日間、市町村実習8日間、学習報告会1日のスケジュールで行った。実習日数は例年と同様に20日間である。実習の準備や調整のため、2020年度の実習期間は6月～7月であった。

3. 実習スケジュールと方法の詳細

実習開始にあたり、実習目標と実習内容を対応させた表を作成し、学生に提示した。実習は、映像教材、事例展開、ロールプレイング等を取り入れながら行った。映像教材は、丸善出版株式会社の映像教材配信サービス Educational Video Online (EVO)、「地域看護活動とヘルスプロモーション」「統・地域看護活動とヘルスプロモーション」「新・地域看護活動とヘルスプロモーション」等を用いた。また、官公庁や学術団体等から公表されている動画や資料を用いた。

日々の実習スケジュール、実習内容、留意事項等は、前日までに Google Classroom に掲示した。また、日々の記録等の提出も Google Classroom を使い、教員からのコメントを記載し、学生へフィードバックした。

実習は Zoom を用いて行い、学生は自宅から参加した。教員は常に2名以上で対応し、学生の接続不良等の不測の事態に早急に対応できる体制とした。グループワークでは、Zoom のブレイクアウトルーム機能を用いて、課題に応じて学生が話し合いをしやすい人数に分けて行った。また、Google ドライブのスプレッドシートの機能を用いて、複数の学生が同時にワークシートに記入できるようにした。

実習スケジュールは、表1の通りである。

表1 実習スケジュール

	日付	学習テーマ	実習内容
オリエンテーション	6/29午前・午後	実習オリエンテーション	オリエンテーションでは、オンライン実習となった経緯、実習スケジュール、実習目標、実習内容、留意事項等を説明した。オリエンテーション後に、保健師の実際の活動をリアリティをもって感じられるように、「明日へつなげよう 証言記録 感染症から巨大避難所を守れ」(NHK) ³¹ の動画視聴を行い、学生が感想を記載した。
地域診断実習	6/30午前	地域診断実習オリエンテーション 地域診断のすすめ方	地域診断実習のオリエンテーションを行い、地域診断実習の方法、記録用紙、地区踏査の詳細等を説明した。また、学生が居住する自治体について地域診断を行うことを伝え、資料や方法を説明した。自治体のホームページの統計資料の検索方法、データの見方等をZoomで画面共有しながら説明した。
	6/30午後	地域の情報収集・整理	学生が居住する自治体の情報収集・整理を行った。教員は、学生の記載内容を確認し、さらに必要な情報や情報へのアクセスの仕方等に関する指導を行った。
	7/1午前・午後	地区踏査計画作成、 地域の情報収集・整理	学生は、各自、地区踏査の計画作成や前日から引き続き地域の情報収集・整理を行った。教員は、学生の進捗状況を確認しながら、個別の指導を行った。
	7/2午前・午後	地区踏査	地区踏査計画をもとに、学生が自身の居住地の地区踏査を実施した（感染予防対策の観点から昼食は自宅で摂るように指示した）。
	7/3午前・午後	地区踏査報告会	2グループに分かれ（13名ずつ）、学生が一人ずつ、地区踏査の報告を行った。質疑応答の時間を十分に与えられるような時間配分とした。
保健所実習	7/6午前	保健所実習オリエンテーション 保健所の業務①	オリエンテーションでは、保健所実習の進め方、実習目標の確認を行った。その後、「新しい保健所」 ³² の動画を視聴した。
	7/6午後	健康危機管理	学生が新型コロナウイルス感染症流行時における水害発生時の避難所の工夫についてのグループワーク、発表を行った。
	7/7午前	保健所の業務②	教員は保健所の状況や各課の業務について説明した。学生はさいたま市の保健所・保健センター事業概要 ³³ を用い、組織の特徴、総務、対人、対物業務に関する課題を行った。
	7/7午後	事例展開① (精神・感染症・難病)	精神、感染症、難病について学生の希望にもとづくグループに分かれ、学生がそれぞれの事例についての事例展開を行った。
	7/8午前	感染症保健事業	学生は感染性胃腸炎についてグループワークを行った。その後、教員が結核の発生に伴う保健所の対応について説明した。
	7/8午後	事例展開② (精神・感染症・難病)	精神、感染症、難病について、学生が昨日に引き続き事例展開を行った。
	7/9午前	精神保健事業	教員が精神保健事業に関する法律や保健所の役割、退院後の支援について説明した。その後、学生が自身の居住地における精神保健に関する制度や施設を調べる課題を行った。
	7/9午後	難病保健事業	ALSの療養者の動画を用いて、保健師の役割、人工呼吸器の選択、災害時の支援等を教員が説明し、学生が必要な支援について検討した。
	7/10午前	事例展開発表	精神、感染症、難病について、学生が事例展開してきた内容をグループごとに発表した。
	7/10午後	保健所実習まとめ	保健所実習の振り返りとして、個人面接を行った。教員は、学生の学びの達成度、体調について確認をした。
	市町村実習	7/14午前・午後	保健センターの機能と役割
7/15午前		新生児訪問①	赤ちゃんの泣き声の音声を聴き、学生が目をつぶってきき、感想を記載した。その後、新生児訪問の実施手順の動画を視聴した。
7/15午後		精神保健相談	高齢の母親とアルコール依存症の息子の生活支援に関する事例展開をグループに分かれて行い、発表した。また、べてるの家 ³⁴ の活動を紹介し、学生が感想を記載した。
7/16午前		新生児訪問②	教員がEPDSとボンディングについて実際の記入例を用いて説明した。その後、学生はグループに分かれ、新生児訪問の訪問計画を立案した。
7/16午後		新生児訪問③ 先輩保健師の講話	新生児訪問の計画書の発表会を行った。その後、学生は、行政保健師をしている卒業生から、実際の保健活動についての説明を受けた。また、学生からの質問に対する質疑応答を行った。
7/17午前		乳幼児健診①	実際の自治体で使用されている乳幼児健診の資料を用い、健診全体の流れ、カンファレンスに関する説明、教員による問診のデモンストレーションを行った。その後、学生がグループに分かれ、乳幼児健診の問診のロールプレイング実施準備を行った。
7/17午後		公衆衛生看護倫理	学生がグループに分かれ、公衆衛生看護倫理に関する4ステップモデル ³⁵ を用いて事例検討し、グループごとに発表した。
7/20午前		がん検診、特定保健指導	市町村におけるがん検診の実施方法、予算管理、事務作業等を教員が説明した。また、国民健康保険事業実施計画について説明した。その後、学生が特定保健指導の面接で重要なことを検討した。
7/20午後		乳幼児健診②	学生が7/17から準備を行った乳幼児健診の問診のロールプレイングをグループに分かれて実施し、グループメンバーと教員と共に、振り返りを行った。
7/21午前		発達障害児への支援	自閉症スペクトラムについて、家族の思い、保健センターと療育施設の連携等について教員が説明した。その後、当事者が執筆した小説である「こうたもどっておいで」 ³⁶ （東京図書出版会、2006）の書籍の一部を教員が朗読し、学生が感想を記載した。

	7/21午後	電話相談・窓口業務	電話相談に関する動画を視聴した。その後、教員が電話相談のデモンストレーションを行い、学生はその後に電話相談の事例展開を行った。
	7/22午前	乳幼児健診③	学生が4か月健診、1歳6か月健診、3歳児健診の中から希望する健診を選択し、事例展開を行った。その後、発表会を行った。
	7/22午後	介護予防・地域包括ケアシステム	地域づくりにおけるPDCAサイクルの実際について教員が説明した。また、地域包括ケアシステムに関する動画を視聴した。
	7/23午前・午後	学習報告会準備	学習報告会での発表の準備として、学生は地域診断の視点を含めて、市町村実習の学びをまとめる課題を行った。
地域診断実習	7/27午前・午後	地域診断実習発表会	学生はグループに分かれ、地域診断実習で各自が行った地域診断の課題の発表を行った。その後、グループ内で自治体を1つ選択し、地域ケアシステムの構築と地域全体への波及効果に関する課題を行った。その後、グループごとに発表を行った。
学習報告会	7/28午前・午後	学習報告会	学生は、一人ずつ今回の実習での学びを発表した。その後、全体でテーマを決めてディスカッションを行った。テーマは、事前に学生の希望を取り、最も希望が多かった「保健師の役割」であった。司会やタイムキーパーも学生が行った。午後は、個別面接を行い、評価表による学びの振り返り等を行った。また、体調や実習に対する思い等についても確認をした。

- ※ 1. 明日へ つなげよう 証言記録 感染症から巨大避難所を守れ。NHK 総合で2020年6月19日（金）午前1:00～午前1:50（50分）再放送で放映されたものである。原発事故後に避難所でノロウイルスが発生した際に、衛生状況を改善する仕組みを作ったり、長期にわたる避難所でのコミュニティを形成したり、避難所運営の実際を表した内容である。
- ※ 2. 新しい保健所。昭和24年に制作され、戦後直後の保健所の活動が紹介された動画である。全国保健所長会のホームページに掲載されている。全国保健所長会：[01] 概要>沿革。http://www.phcd.jp/01/enkaku/index.html（閲覧日 2022年11月2日）
- ※ 3. 平成30年度保健所・保健センター事業概要。さいたま市保健所保健総務課企画係によって2019年9月に編集・発行されたさいたま市の概況、保健所・保健センターの組織や事業が記載された資料である。さいたま市：平成30年度保健所・保健センター事業概要。https://www.city.saitama.jp/008/016/001/017/p066732_d/fil/zentai.pdf（閲覧日 2022年11月2日）
- ※ 4. べてるの家。北海道浦河町にある精神障害者の当事者の活動拠点である。当事者研究として、メンバー同士で病気や生活のこと等を日々話し合い、当事者の視点から報告している。べてるねっと：https://bethel-net.jp/（閲覧日 2022年11月2日）
- ※ 5. 4ステップモデル。倫理的意思決定のための事例検討を系統的に行うために、4つのステップ（ステップ1 全体の状況把握、ステップ2 対象のニーズと看護師の責任、ステップ3 行動の選択肢の列挙、ステップ4 とるべき行動の最終判断）を踏み、関係者・状況の把握から看護職としての行動を波及効果まで含めて考える方法である。小西恵美子、編：看護倫理 よい看護・看護師への道しるべ、改訂第3版。135-143、南江堂（2021）
- ※ 6. こうたもどっておいで。自閉症スペクトラムの子どもを育てた経験がある著者が執筆した小説で、母親が追いつめられる過程を母親本人や周囲の人々の思いから描いた作品である。柳田節子：こうたもどっておいで。東京図書出版会（2006）

1) オリエンテーション（1日間）

学生に実習目標と実習内容を説明した。実習目標と実習内容の関連について表を作成し、提示した。また、オンラインによる実習を行うことになった経緯について丁寧に説明した。

2) 地域診断実習（5日間）

学生自身が居住する地域の地域診断をコミュニティ・アズ・パートナーモデルに沿って行った。地区踏査を半日かけて行い、その内容を学生間で意見交換した。保健所実習、市町村実習の期間も継続して地域診断を行い、最終日前日に地域診断の発表会を行った。4～5名のグループで各自が行った地域診断シート（情報収集、アセスメント、健康課題、支援方策、評価の視点）の発表を行い、さらにグループで地域ケアシステムの構築を検討した。

3) 保健所実習（5日間）

保健所実習オリエンテーション、保健所の機能と役割（事業概要等）、感染症保健事業、難病保健事業、精神保健事業、事例展開（グループワーク、発表会）の内容で実施した。保健所実習最終日の午後、個別面接を行い、学生の学習状況や体調等を確認した。

4) 市町村実習（8日間）

市町村実習オリエンテーション、保健センターの機能と役割（事業概要等、保健センター紹介パンフレットづくり）、新生児訪問（訪問計画）、精神保健相談、先輩保健師の講話、乳幼児健康診査（説明、事例展開、問診のロールプレイング）、公衆衛生看護倫理、がん検診、特定健診・特定保健指導、発達障害児支援、電話相談・窓口業務、介護予防・地域包括ケアシステムの内容で実施した。保健センター紹介パンフレットは、対象や内容を学生自身が決めて作成した。作成後にピア評価を行った。

5) 学習報告会（1日）

実習最終日に、全体での学びを共有した。学生は、一人ずつ今回の実習での学びを発表した。その後、テーマを決めて全体ディスカッションを行った。テーマは、事前に学生の希望を取り、最も希望が多かった「保健師の役割」であった。午後は、個別面接を行い、自己評価表による学びの振り返り等を行った。

Ⅲ. 学生の学びの分析

1. 分析に用いた資料

分析に用いた資料は、学生が実習目標を達成するために実習中および実習後に提出した、自己評価表、科目評価に関するアンケート、最終レポートである。

1) 実習目標に対する自己評価表

実習目標に対する学生の自己評価であり、実習目標に対して4段階の点数（4.よくできた、3.だいたいできた、2.あまりできなかった、1.ほとんどできなかった）を記載したものである。実習最終日まで記載を求め、教員との個別面接時に使用した。その後の提出は任意とした。

2) 科目評価アンケート

教育評価のために学生がWEB上で回答する無記名のアンケートである。内容は、実習の満足度、メンバーシップ、実習内容に関すること、教員の指導方法、実習時の体調等であり、4段階のスケール（あてはまる、ほぼあてはまる、あまりあてはまらない、あてはまらない）と自由記載による意見を求めたものである。

3) 最終レポート

最終レポートのテーマは、公衆衛生看護学実習Ⅱの学びを、各自テーマを決めて記述する内容である。ルーブリックによる評価の視点を学生に提示している。字数は3000字程度である。

2. 分析方法

実習目標に対する自己評価表は、学生の点数の中央値と平均値を示した。科目評価アンケートは、項目ごとに単純集計を行った。自由記載による意見は、すべての意見を原文のまま記述した。学生の最終レポートは、内容分析を行い、意味のまとまりの単位で学生の学びを抽出し、抽象度をあげ、サブテーマ、テーマ名をつけた。

統計処理は、Microsoft Excel 2016を用いた。

3. 倫理的配慮

分析に用いた資料は、学習評価、教育評価のために提出されたものである。分析で使用するに関して、学生へ説明し、文書による同意を得た。説明会は、学生が大学に登校する予定に合わせて設定した。また、公衆衛生看護学実習Ⅱの成績通知後に行い、同

意の有無は一切成績に影響しないことを伝えた。学生の同意は、自己評価表、科目評価アンケート、最終レポート毎に同意をとり、学生が意思を表出しやすいようにした。自己評価表、最終レポートは直ちに匿名化し、個人が特定できないかたちで分析を行った。科目評価アンケートは、匿名でのアンケートのため個人を識別することはできない。そのため1人でも分析に同意が得られない場合は、データ全体を分析に使用しない計画を立てたが、すべての学生から分析の同意が得られた。

また、その他の資料についても26名のすべての学生が分析に同意した。

目白大学医学系研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：20医-025、承認日：2020年9月29日）。

Ⅳ. 学生の学びの様相

1. 学生の自己評価表

学生の自己評価表の提出は、19名（有効回答率73.0%）であった。学生の自己評価表の点数は、4段階のスケールで、すべての項目において中央値は3～4の範囲であり、平均値は3点台であった。すべての学生が目標に対して、「よくできた」「だいたいできた」と評価した（表2）。

2. 科目評価アンケート

科目評価アンケートの提出は、21名（有効回答率80.8%）であった。実習の満足度、メンバーシップ、実習内容に関すること、教員の指導方法等は、すべての項目で、19名（90%）以上の学生があてはまる、ほぼあてはまると回答した。一方で、約半数にあたる10名の学生がパソコンを長時間使用することによる身体的・精神的不調を経験していた。また、追加出費であった学生は5名（23.8%）であった（表3）。

自由記載の意見として、「実際に現場を経験できることが一番だが、遠隔実習にも関わらず想像していたよりも多くのことを学ぶことができ満足している」「実際の保健師の仕事をこの目で見てみたい気持ちもあるが、学びとしてはたくさんを学ぶことができた達成感があり満足している」等があり、肯定的でありながらも現場での経験を望む思いがみられた。

表2 実習目標と学生の自己評価

	中央値	平均値
1. 保健所機能と保健所保健師の活動と役割を学ぶ。		
1) 保健所の組織・機能を理解する。	4	3.6
2) 感染症保健活動の実際を知り、感染症予防と発生時における保健師の役割を理解する。	4	3.7
3) 難病患者への保健活動の実際を知り、難病患者支援のネットワークづくりと保健師の役割を理解する。	4	3.7
4) 地域における精神保健活動の実際を知り、精神疾患の患者と家族への支援から保健師の役割を理解する。	3	3.5
5) 保健所における健康危機管理の実際を理解する。	4	3.6
2. 市町村の健康課題と保健師活動の実際を知り、健康課題への取り組みと市町村保健師の役割を学ぶ。		
1) 市町村の保健担当部署（保健センター等）の役割と機能を理解する。	4	3.7
2) 地区踏査で、足を使って市町村の情報を収集できる。	4	3.8
3) 既存資料や統計資料を用いて市町村の地域特性や健康課題をアセスメントできる。	3	3.5
4) 事業の目的、根拠法令、経緯、対象者選定の根拠が理解できる。	3	3.2
5) 保健事業の目的や対象（個人、家族、集団）に応じた保健活動の実際が理解できる。	4	3.8
6) 市町村の地域特性や健康課題を生活者である当事者の視点で踏まえてアセスメントできる。	3	3.5
7) 市町村における保健師の役割について理解できる。	4	3.8
3. 地域の保健医療システムを理解し、他職種と連携・協働した保健師の役割・機能を学ぶ。		
1) 保健所における関係機関や他職種との連携・協働の実際を知り、保健所保健師の役割が理解できる。	3	3.4
2) 市町村における関係機関や他職種、住民との連携・協働の実際を知り、市町村保健師の役割が理解できる。	4	3.7

評価基準【1～4】 4：よくできた 3：だいたいできた 2：あまりできなかった 1：ほとんどできなかった

3. 最終レポートの内容分析

最終レポートは、26名全員のレポートを分析した。学生の学びとして、10のテーマが示された（表4）。

1) すべての保健活動が地域づくりへつながっている

学生は、日頃の活動から地域をとらえ、個別支援と地域全体の支援を連動させることや、地域の持っている力を引き出す大切さに気付き、すべての活動が地域づくりとつながっていると考えていた。

2) 暮らしやすい地域は住民や多職種と共につくるものである

学生は、住民自身が健康になれるようにサポートすることが保健師の役割であり、住民と共にその実現に向けた環境をつくるのが大切であると考えていた。そのために住民のニーズをとらえながら一緒に取り組むこと、それぞれの職種の強みを活かしながら協働して取り組むことの重要性を学んでいた。

3) PDCA サイクルの実践方法とその効果がわかった

学生は、保健師の強みは施策化できることだと感じ、PDCA サイクルをまわしながら、住民の健康課題を解決していく重要性について学んでいた。さらに、施策化の基礎となる法律や制度の知識をもつ必要性を感じていた。

4) 健康問題が顕在化していない段階からのアプローチが大切だ

学生は、健康問題が生じていない段階から関わることは難しいが、それでもこの段階から働きかけることの重要性を感じていた。対象者が何のために健康でいたいのかという思いを大切に、行動変容に向けて日常生活でできることを少しでも取り入れていく等の工夫を考えていた。

5) 保健師が待っているだけでは、保健活動は進まない

学生は、保健活動を行うためには、保健師を身近に

表3 科目評価アンケート結果

N = 21

	あてはまる		ほぼあてはまる		あまりあてはまらない		あてはまらない	
	n	(%)	n	(%)	n	(%)	n	(%)
実習に楽しみながら参加できた	6	(29%)	13	(62%)	2	(10%)	0	(0%)
実習での学びに満足できた	12	(57%)	9	(43%)	0	(0%)	0	(0%)
日々の実習目標を立て、目標達成を意識しながら実習ができた	14	(67%)	7	(33%)	0	(0%)	0	(0%)
日々の学習を振り返り、積み重ねながら実習できた	16	(76%)	5	(24%)	0	(0%)	0	(0%)
メンバーで、協力しながら実習できた	14	(67%)	6	(29%)	1	(5%)	0	(0%)
メンバーで、互いに高め合いながら実習できた	11	(52%)	10	(48%)	0	(0%)	0	(0%)
実習環境を整えるための工夫をした	16	(76%)	4	(19%)	1	(5%)	0	(0%)
実習オリエンテーションにより、実習のイメージができた	8	(38%)	12	(57%)	1	(5%)	0	(0%)
実習目標と実習内容が連動していることが理解できた	17	(81%)	4	(19%)	0	(0%)	0	(0%)
実習目標にそって、プログラムの内容は準備されていた	18	(86%)	3	(14%)	0	(0%)	0	(0%)
実習目標は、わかりやすかった	18	(86%)	3	(14%)	0	(0%)	0	(0%)
日々のスケジュールがわかりやすかった	15	(71%)	6	(29%)	0	(0%)	0	(0%)
実習目標を達成するために必要な学習体験ができた	15	(71%)	6	(29%)	0	(0%)	0	(0%)
教員の説明や動画視聴により、保健師の活動の実際を理解できた	18	(86%)	3	(14%)	0	(0%)	0	(0%)
事例検討により、保健師の活動の実際を理解できた	14	(67%)	7	(33%)	0	(0%)	0	(0%)
ロールプレイにより、保健師の活動の実際を理解できた	16	(76%)	5	(24%)	0	(0%)	0	(0%)
実践現場の保健師からの講話により、保健師の活動の実際を理解できた	13	(62%)	7	(33%)	1	(5%)	0	(0%)
実習を通して、保健活動の実践をイメージできた	16	(76%)	5	(24%)	0	(0%)	0	(0%)
実習を通して、幅広い分野を学ぶことができた	20	(95%)	1	(5%)	0	(0%)	0	(0%)
休憩時間は適切に組まれていた	17	(81%)	4	(19%)	0	(0%)	0	(0%)
記録や課題の量は、負担にはならなかった	4	(19%)	16	(76%)	1	(5%)	0	(0%)
実習を通して、公衆衛生看護を实践するための基礎的な知識を身につけることができた	13	(62%)	8	(38%)	0	(0%)	0	(0%)
実習を通して、住民の生活や思いを実感できた	11	(52%)	9	(43%)	1	(5%)	0	(0%)
実習で学んだ知識や支援方法を活かして、実際の住民の生活や思いにそった支援を考えることができた	13	(62%)	8	(38%)	0	(0%)	0	(0%)
学生が困ったときに、適切なサポートが得られた	17	(81%)	4	(19%)	0	(0%)	0	(0%)
教員は学生の考え方や行動を尊重してくれた	20	(95%)	1	(5%)	0	(0%)	0	(0%)
教員は学生が理解しやすい言葉や方法で指導していた	20	(95%)	1	(5%)	0	(0%)	0	(0%)
教員は学生の身体面や精神面を配慮して指導をしていた	19	(90%)	2	(10%)	0	(0%)	0	(0%)
グループワーク等では、教員から適切な助言・指導が得られた	18	(86%)	3	(14%)	0	(0%)	0	(0%)
記録等は、教員から適切な助言・指導が得られた	18	(86%)	3	(14%)	0	(0%)	0	(0%)
中間面接、終了時面接では、学生の思いを本音で話すことができた	21	(100%)	0	(0%)	0	(0%)	0	(0%)
通信等のトラブルはほとんどなかった	8	(38%)	11	(52%)	2	(10%)	0	(0%)
パソコンを長時間使用すること等による身体的・精神的な不調はなかった	2	(10%)	9	(43%)	9	(43%)	1	(5%)
実習の時期は、適切な時期であった	9	(43%)	12	(57%)	0	(0%)	0	(0%)
ICTによる実習を行うために、追加の出費はなかった	8	(38%)	8	(38%)	5	(24%)	0	(0%)

感じてもらい、保健師ができることを伝える等、保健師側から住民にはたらきかけていくことが重要であると考えていた。そして、保健センターが住民にとって来たいと思える施設、利用しやすい施設であることが重要であると考えており、興味を引く案内を作成することも保健師の役割であるとしていた。

6) 対象者に受け入れられてこそ、支援を行うことができる

学生は、地域住民との信頼関係が基礎となり、対象者に受け入れられてこそ、保健活動ができることを感じていた。そのために、対象者の状況や様子に応じて、きき方や伝え方に気を配ること、対象者をねぎらい、思いやる気持ちを示していくことの大切さを感じ

表4 最終レポートから抽出された学生の学び

テーマ	サブテーマ	学生の記述の例 (意味を保持したまま、表現等の一部に修正を加えた箇所あり)
すべての保健活動が地域づくりに関わっている	地域の強みを大切に、地域の持つ力を引き出すことが重要だ 個別支援と地域全体の支援は別々ではなく、常に連動している 日頃の活動から地域をとらえることができる	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の強みや大切にしていること・考え方等を尊重し、解決に向けて歩いていくことで、地域のエンパワメントを促進し、地域の課題解決へとつながっていくと感じた。 ・地域で生活する力を持っている人々であるからこそ、その力を活かせるようにすることが重要である。 ・個別の対応と地域への対応を別々のものとして考えるのではなく、すべての業務が地域づくりにつながっていくという意識をもって取り組んでいく姿勢が重要である。
暮らしやすい地域は、住民や多職種と共につくるものである	保健師が住民を健康にするのではなく、住民自身が健康になれるようにする 住民のニーズをとらえながら、一緒に協働して取り組む それぞれの職種の強みを活かし、つながりをつくりながら活動する	<ul style="list-style-type: none"> ・保健師が一方的に地域に対して働きかけるだけでなく、住民の主体性を活かした支援を行うことが重要である。 ・地域住民との関わりの中から、生活背景や意思をききながら、住民と共に健康づくりをしていく。 ・住民の参加によって保健師等の専門職が今まで認識していなかった実態を知ることができたり、専門職自身の価値観が問い直されたり、専門職だけでは思いつかなかった新しいアイデアを知ることができたり、多くのメリットがある。 ・保健師だけでは解決できないことも、多職種で連携して、住民も巻き込んでみんまで作っていくことができる。 ・それぞれの職種が持っている力を活かすことができるように事業を考え計画していた。
PDCA サイクルの実践方法とその効果があった	保健師は施策化を通して、住民の思いを形にしていけることができる 法律や制度、行政や医療の知識を持ち、活動に反映させる 保健師は事業の企画、運営、評価を行い、PDCA をまわしながら活動している 保健師の強みは必要な資源を自ら作り出せることである	<ul style="list-style-type: none"> ・保健師は、考えや支援を押し付けず、常に地域住民を主体として意見を取り入れながら企画を運営したり、施策に結びつけていくことで、当事者・支援者の声を形にしていけることができる。 ・保健師は看護や行政の知識をふまえた上で、地域を知る姿勢や住民の声を地域活動に反映していくことが重要である。 ・評価からみえた新たな課題や改善点についても一度アセスメントを行い、この一連を日々繰り返していくPDCA サイクルの実践は、保健師の役割の中の基本的かつ重要な考え方であると思う。
健康問題が顕在化していない段階からのアプローチが大切だ	ハイリスクでない人々に工夫して関わる必要が 日常生活に取り入れられることから始めることが大切だ 何のために健康でいたいたいのかという対象者の思いに目を向ける	<ul style="list-style-type: none"> ・対象者に自覚症状がない場合、事業への参加が積極的でない場合がある。健康である住民が参加し、自身の健康状態を確認することによって意識づけにつながる。そのため、保健師は対象者のニーズを計画に反映しながら、楽しく健康づくりが行えるようにする必要がある。 ・地域住民が自身の日常生活に取り入れやすく、継続できるような支援を一緒に考えながら関わっていくことが重要である。 ・健康になる事が目標ではなく、何のために健康でいたいたいのかという対象者の思いを大切にすべきであることを学習した。
保健師が待っているだけでは、保健活動は進まない	保健師を身近に感じてもらい、相談しやすい雰囲気を作り出す必要がある 保健師ができることを伝えていく必要がある 興味を引く案内や行きたいと思える施設にしていく必要がある	<ul style="list-style-type: none"> ・積極的に関わることで保健センターや保健所、保健師を身近に感じてもらい、信頼関係を構築し、相談しやすい雰囲気を作り出すことが重要である。 ・保健師が待っているだけでは、予防活動は進んでいくと、地域住民との信頼関係を築いていくところから関わりは始まっている。 ・保健師という仕事かどのようなものか、何を行っているのか等を住民が知らないことも考えられるため、一人でも多くの人が保健師や保健所、保健センターに関する情報を得ることができるようになっていく必要がある。 ・保健所や保健センターの利用しやすい雰囲気や具体的な活動方法を周知していくところから始まり、住民が望んでいる予防活動を見極めて介入していくことが重要である。

<p>対象者に受け入れられ、支援助を行うことができ</p>	<p>効果的な保健活動には信頼関係が不可欠である 相談方法や対象者の様子に応じて、きき方、伝え方等の一つひとつに気を配る ねぎらいや相手を思いやる気持ちを伝えることが必要だ</p>	<p>信頼関係を築くことで、些細なことでも相談をしてくれるようになっていくことが可能になる ・電話相談では、育児や健康上の相談、匿名のもの、緊急性のあるもの等さまざまであり、適切な声かけや対応が必要である ・顔が見えない・表情や反応もわからない中で相談業務を行うことがあり、保健師自身の情報の引き出し方、話し方やきき方が重要である ・ねぎらいの言葉をかけ、相手を思いやる気持ちをしっかりと言葉にすることも重要である</p>
<p>対象者らしい生き方ができるように長期的な視点で支援助を行う</p>	<p>対象者の信念や価値観を考えながら、寄りそう支援助を行う 家族をはじめ対象者を取り巻く環境に目を向ける 地域で生活している存在という視点で考える どんな時でも対象者のよいところを伸ばしていくことが大切だ 保健師は継続的に関わることでできるため、今だけでなく長期的にみる視点が必要だ</p>	<p>本人や家族が納得して、今後の選択ができるよう支援助を行う。 ・支援内容をそれぞれ対象に合わせること、支援の主体は本人とその家族であることは、全てに共通している。 ・本人だけでなく、家族や周囲の負担感や疲労感を考えていくことが必要だ。 ・地域で生活している人の視点で、住民の生活への思いを尊重しながら、一人ひとりの気持ちと向き合っていくことが必要である。 ・どんな時でも対象の良いところを伸ばしていくけるように一緒に考えて、時には見守りながら向き合っていく姿勢が重要である。 ・保健師は継続的な関わりが可能であるため、対象者の今だけでなく、長期的にみる視点も必要である。</p>
<p>保健師は、正確な知識、アセスメント力、倫理的な姿勢が求められる</p>	<p>多角的な視点もち、さまざまな可能性を考えられるアセスメント力が必要だ 保健師の活動は思っていた以上に幅が広く、さまざまな技術を統合している 保健師は、専門職として正確な知識を身につけなければいけない 保健師の活動は人権や倫理的側面が常に含まれる</p>	<p>乳幼児健診では、乳幼児の発育の評価だけでなく、親の態度や兄の行動、外見、親と子の関わり、親と多職種の話の様子等にも生活の様子が分かる重要な情報が隠れていると感じた。 ・相談事業は保健師が常に行う事業である。相談内容や話の流れに対して、保健師は状況に合わせて対象者のアセスメントを行い、支援の必要性を判断する必要がある。 ・違う視点のアセスメントでも、どちらも間違いではなく、可能性としてさまざまな視点を持つ必要がある。 ・保健師に知識のない場合、相談者の不安感や不信感が生まれ、今後の支援につながらない可能性がある。 ・結核では、入院理由を納得していただけたように説明することは、人権擁護の役割もある。 ・保健師は日常の活動の中で複雑な問題をかかえる人々との出会い、解決が困難な問題に直面する。通常では知り得ない家族関係や経済状態等の個人のプライバシーに立ち入りすることもある。倫理は看護職の概念として基本であり、基本盤である。</p>
<p>健康危機管理における保健師の役割は多岐にわたり、日頃の活動とつながっている</p>	<p>健康危機に備えて、平常時から対策を考えたおくことが必要だ 健康危機時の保健師の役割は多岐にわたり、連携しながら対応する 健康危機管理においても、地域をみる視点、住民をみる視点が重要になる</p>	<p>災害時でも難病患者が素早く避難でき、安心安全に暮らすことができる地域にするために平常時から支援助を行なっている。 ・災害時の保健師は避難者の衛生、環境、食事や健康管理、感染等の多面的な視点で対策を考え、健康被害の発生予防、拡大防止、治療等に関する業務を行っていると考えた。 ・地域をみる視点、住民をみる視点は災害時にも重要になるのだと考える。医療的な視点だけでなく、住民の視点に立ってみることで、災害各期の支援助を考え対応していくことが重要である。</p>
<p>実習で学んだ視点を今後活かしたい</p>	<p>国も地域包括ケアシステムを推進しており、看護師で働くときもこの視点を役立てられる 地域での生活者であることを念頭に置いて、対象者をとらえたい 保健師としての考え方や多職種連携は、さまざまな場面で必要だ</p>	<p>就職先は病院になっているが、保健師の資格も持つ者として、地域との連携や病院に入院している状態だけでなく、その人が暮らしている地域へと戻っていくことを念頭に置いて、さまざまな視点から対象者をみることでできるようにしていきたい。 ・看護師として働くときににも患者が退院して地域に戻ることを考えながら、退院を見届けた看護を思い、地域に寄り添った支援助を行えるようにしていきたいと考える。</p>

ていた。

7) 対象者らしい生き方ができるように長期的な視点で支援を行う

学生は、個別支援に関する対象者への関わり方として、対象者の信念や価値観、取り巻く環境までも考えながら、対象者の特徴に着目しながら支援することを大切に考えていた。また、継続的に関わることができるとを活かし、長期的な視点を大切に考えていた。

8) 保健師は、正確な知識、アセスメント力、倫理的な姿勢が求められる

学生は、保健師の業務の幅広さを感じ、正確な知識、様々な可能性を考えるアセスメント力が保健活動を行う上で必要であると感じていた。そして、保健師が関わる対象者の人権等を考えながら、専門職としての倫理的な姿勢の重要性を感じていた。

9) 健康危機管理における保健師の役割は多岐にわたり、日頃の活動とつながっている

学生は、健康危機管理において、平常時からの活動や地域づくりが、健康危機発生時に影響することを感じていた。

10) 実習で学んだ視点を今後活かしたい

学生は、看護師として病院で働く上でも、入院患者も地域の生活者であり、地域に戻ることを見据え、多職種で連携していくことが重要であると感じていた。

V. 考察

1. 地域づくりから施策化に連動していく視点

【すべての保健活動が地域づくりへつながっている】【PDCA サイクルの実践方法とその効果がわかった】は、個別の課題を地域全体の課題とし、地域づくりを通して課題の解決を目指す視点での学びであった。保健師の課題として、ハイリスク対応や事業が優先され、地区活動を十分に行うことが難しいことがあげられ、新人保健師の地域をみる・考える能力の強化が求められる状況がある^{6,7)}。また、真山は、保健師が日常業務で得ている住民の生活や地域社会の実態情報を政策形成に活用する重要性をあげている⁸⁾。これらの能力の獲得のためには、基礎教育の段階から施策化を視野に入れた日頃の保健活動の意義を意識することが重要であると考え。今回の実習は、臨地で学ぶことはできなかったが、地域診断・地区踏査を実習の序盤で行い、それらの学びを保健所実習、市町村実習においても折に触れて強調すること、地域ケアシステムの

構築やその波及効果までワークに取り入れたことが、これらの学びにつながったと考える。

2. 本実習の学びの特徴と「保健師に求められる実践能力と卒業時の到達目標と到達度」との関連

「保健師に求められる実践能力と卒業時の到達目標と到達度」⁹⁾では、到達度の大項目として、“地域の健康課題を明らかにし、解決・改善策を計画・立案する”、“PDCA に基づき、地域の人々・関係者・関係機関と協働して、健康課題を解決・改善し、健康増進能力を高める”、“地域の健康危機管理を行う”、“地域の人々の健康を保障するために、公平・公正に制度や資源を管理・開発する”、“保健・医療・福祉及び社会に関する最新の知識・技術を主体的・継続的に学び、実践の質を向上させる”の5つがあげられている。今回の実習における学生の学びにおいても、これらの到達目標と関連するテーマが示された。

“地域の健康課題を明らかにし、解決・改善策を計画・立案する”は【すべての保健活動が地域づくりへつながっている】【健康問題が顕在化していない段階からのアプローチが大切だ】、“PDCA に基づき、地域の人々・関係者・関係機関と協働して、健康課題を解決・改善し、健康増進能力を高める”は【暮らしやすい地域は、住民や多職種と共につくるものである】【対象者らしい生き方ができるように長期的な視点で支援を行う】【保健師が待っているだけでは、保健活動は進まない】【対象者に受け入れられてこそ、支援を行うことができる】が関連した。また、“地域の健康危機管理を行う”は、【健康危機管理における保健師の役割は多岐にわたり、日頃の活動とつながっている】、“地域の人々の健康を保障するために、公平・公正に制度や資源を管理・開発する”は、【PDCA サイクルの実践方法とその効果がわかった】、“保健・医療・福祉及び社会に関する最新の知識・技術を主体的・継続的に学び、実践の質を向上させる”は、【保健師は、正確な知識、アセスメント力、倫理的な姿勢が求められる】が関連した。5つの到達目標の項目すべてに関連するテーマが分類された。保健師の実践能力や到達目標は、助産師の実践能力や到達目標である“妊娠の診断とケア”、“分べん期の診断とケア”等⁹⁾や看護師の技術項目や到達度である“環境調整技術”、“食事の援助技術”、“排泄援助技術”等⁹⁾に比べ、視点や考え方に専門性があらわれる特徴があると考え

る。事例やロールプレイング、教員の相談場面の実演等を行い、保健師の支援の視点や活動の意図を丁寧に説明していくことで、学生の保健師としての能力の基礎を培うことができると考える。また、COVID-19等の学生が実際に経験した内容は、現場の困難や倫理的課題を想像しやすく、効果的な学習教材であったと考える。

これらの実習内容は、臨地実習が困難な場合のみならず、実習前後の演習等に組み込んでいくことで、臨地実習の効果をあげていくことができる可能性がある。

3. オンライン実習による課題

臨地実習では、学生は現場で生じる予測のつかない状況、住民との心を介した交流、学生自身の行動に対する振り返り等を通して成長すると考える。塩見らは、臨地での場を共有することで生じる学びの重要性をあげ¹⁰⁾、本田らは、保健師の現場の暗黙知も含めた実感を通じた理解がないと到達することが難しい課題について示している¹¹⁾。今回の代替実習は教員が課題を作成し、その枠の中で進むものであった。学生の自己評価表の数値が比較的高いことは評価できる一方で、臨地実習で直面する困難な状況を学生自身が想像しにくく、各々の学生によって異なる自己の課題に主体的に取り組む等のオンラインの実習では学ぶことが難しかった側面に学生自身が気づきにくかった可能性がある。

オンラインによる実習という今までに行っていない実習方法をとっており、臨地での実習と比較した場合に、学ぶことが難しかった側面を本稿では十分に示すことができていないため、学生への学びの影響を長期的に評価していく必要があると考える。

4. パソコンを長時間使用することによる学生の体調の不調

多くの学生にパソコンを長時間使用することによる身体的・精神的な不調があった。オンラインによる実習を行うためには、実習中や課題作成において、学生が長時間パソコンを使用することが不可避であった。休憩時間を長く取ったり、身体を動かす時間を設けたり、個別ワーク・グループワークを織り交ぜる等の工夫をしたが、予防することが難しかった。また、対面で行っていないため、学生の表情や雑談等から、学生

の思いや体調を捉えにくい状況であった。オンラインを用いる場合においては、学生と個別に話す時間を設定したり、体調等をより丁寧に把握していく必要性が示された。

5. 分析の限界と今後の課題

本稿は単年度の学生の学びの分析であり、さらに臨地において実習した場合の学生の学びの到達度と比較することができていない。

オンラインによる実習では学びにくいと考えられる暗黙知や五感を通して把握される学び等についても検討していく必要がある。また、今回のオンラインの内容を学内演習で行うことも含めて、より効果的な実習方法を検討していく必要があると考える。

また、対象者が少なく、自己評価表、科目評価アンケートの提出は任意であり、すべての学生から回答が得られていないことから、結果に偏りが生じた可能性がある。学びの内容においてもレポートの記述を内容分析したものであり、到達度の程度までは明らかにできておらず、学生の学びについて到達度の程度まで検討していく必要がある。

謝辞

ご協力いただきました皆様に心より感謝いたします。また、本稿の一部は、第24回日本地域看護学会学術集会で発表した。利益相反はない。

【文献】

- 1) 文部科学省：保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部を改正する省令案新旧対照条文。掲載日2011年1月6日。
https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kango/_icsFiles/afieldfile/2011/05/20/1305957_1.pdf（閲覧日2022年11月2日）
- 2) 岸恵美子：保健師基礎教育の検討状況とこれからの本協議会の活動について。保健師教育4（1）、2-9（2020）
- 3) 内閣官房：新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の実施状況に関する報告。掲載日2021年10月8日。
https://corona.go.jp/news/pdf/houkoku_r031008.pdf（閲覧日2022年9月15日）
- 4) 文部科学省、厚生労働省：新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について（令和2年2月28日付。文部科学省初等中等教育局、文部科学省高等教育局、厚生労働省医政局 他、事務連絡）。
https://www.mext.go.jp/content/202000302-mxt_kouho

- u01-000004520_2.pdf (閲覧日2022年9月15日)
- 5) 看護学教育の在り方に関する検討会：大学における看護実践能力の育成の充実に向けて。
<http://www.umin.ac.jp/kango/kyouiku/report.pdf> (閲覧日2022年11月2日)
- 6) 細谷紀子, 大光房枝, 丸谷美紀, 他：今日の社会・制度・業務体制下における地域のニーズに応じた保健師活動の工夫の特徴。千葉看護学会誌19 (1), 35-44 (2013)
- 7) 湯浅資之, 池野多美子, 請井繁樹：現任保健師が認識している公衆衛生における現状変化とその改善策に関する質的研究。日本公衆衛生雑誌58 (2), 116-128 (2011)
- 8) 真山達志：自治体の政策形成における第一線職員の役割：保健師を例として。同志社政策科学研究21 (2), 53-65 (2020)
- 9) 厚生労働省：看護基礎教育検討会報告書。掲載日2019年10月15日。
<https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf> (閲覧日2022年9月15日)
- 10) 塩見美抄, 細川陸也, 平和也：京都大学におけるCOVID-19流行下の保健師教育課程教育実習 (2) オンライン代替実習の成果と課題。保健師ジャーナル76 (11), 922-925 (2020)
- 11) 本田光, 近藤圭子, 田仲里江, 他：新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 拡大に伴い実施された保健師基礎教育における代替的実習の実践報告。保健師教育5 (1), 75-85 (2020)

(2022年6月26日受付、2022年12月6日受理)

Contents of an alternative practice and student learning through the practice introduced in basic public health nurse education in response to the spread of novel coronavirus (COVID-19) infection

Tomoko NAGAI, Ayaka SASAKI, Hitomi ANZAI

【Abstract】

Objectives: The study aims to review the contents of an alternative online practice introduced in nursing education in response to the COVID-19 pandemic and students' learning and agendas in the practice "Public Health Nursing Practice II" (Community Health Activities), which is required to qualify for the national examination for public health nurses.

Methods: Data from 19 self-evaluation sheets on practice objectives, 21 practice evaluation questionnaires, and 26 final reports from 26 students in the public health nurse course were analyzed. Descriptive statistics was conducted for the self-evaluation sheets and practice evaluation questionnaires, and content analysis was conducted for the final report.

Results: The medians ranged from 3-4, and the means are in the 3-point range on a 4-point scale for all items of student's self-evaluation sheet. All students rated their performance as "well done" or "mostly well done" on the objectives. In the practice evaluation questionnaire, items related to satisfaction with practice, understanding of practice goals, involvement of teachers, etc. had high evaluations, while items related to physical or mental effects due to long-term use of computers had low evaluations. In the content analysis of the final report, 10 themes were extracted, including thoughts on community development and policy making, and the role and attitude of public health nurses.

Conclusions: Although the practice was conducted online, students gained a wide range of knowledge and skills required of a public health nurse and were able to express the role of a public health nurse in their own words. However, since this alternative practice was conducted within the framework of assignments created by the faculty, students were unable to experience learning through on-site interactions with residents, supervisors, and related professionals. Therefore, the effects of such an alternative practice need to be evaluated in the long term.

Key words: public health nurse, basic education, alternative practice, COVID-19, public health nursing

Department of Nursing, Faculty of Nursing, Mejiro University